特別支援学校高等部生徒の教える行動の拡がり

～模擬喫茶店舗で生徒が新人を教えることを通して～

Expansion of Teaching Behavior in a High School Student with disability: Through Teaching Newcomers in a Simulated café Setting

○和田 千鶴　椎原 彩葉　高山 仁志　中鹿 直樹

○Chizuru WADA, Ayaha SHIIHARA,　Hitoshi TAKAYAMA,　Naoki NAKASHIKA

（立命館大学　人間科学研究科）

Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University

Key words: 学生ジョブコーチ, 就労実習, 新人教育役割

目的

立命館大学では，大学構内に設置された模擬喫茶店舗にて特別支援学校に通う生徒に対して学生ジョブコーチ（以下，SJC とする）による就労実習を行っている。ここでは，対象者のありのままの姿を認め，「できる」行動を記録したのち，関係者に向けて伝達する作業をおこなっている（高山・中鹿，2017）。本研究では，対象者に「新人教育」という役割を提示することがもたらす行動変化を捉えることを目的とした。

方法

場所　立命館大学構内に設置された模擬喫茶店舗

期間　X 年 9 月 Y 日～X 年 9 月 Y+4 日の計 5 日間

対象者　特別支援学校高等部の A（男性，２年生）であった。また本実習には B（女性，２年生）が参加していたが，対象者は A のみであった。

倫理的配慮　実習を行う前に特別支援学校の教員と実習参加者２名の保護者に実習についての説明を行い，書面にて実習参加への同意を得た。

手続き　対象者２名は事前に接客や調理などのカフェ業務全般を SJC が用意した手順書に基づいて行うように説明を受けていた。加えて実習初日には，大学院生の協力者１名を新人役として実習参加者２名に紹介し，初日の午後のシフトからは自身の業務を行いながら新人教育を行うように説明した。二日目には，実習参加者が新人教育を実行しやすくなる環境設定として，新人教育のための手順書と，新人ができたことを記録する成長シートを導入し，それらを活用しながら新人教育をするように教示した。実習中，対象者が自発した適応的な行動には即時に賞賛などのポジティブなフィードバック行うことで強化を図った。実習中の様子はすべてビデオカメラにて撮影し記録した。

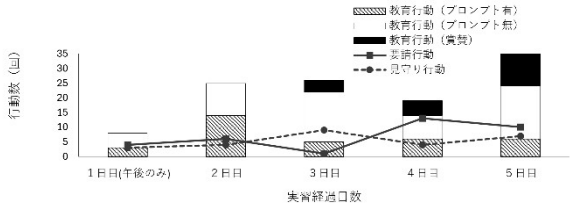
分析　本研究では，実習中の対象者の行動を「教育行動」（直接的な情報提供・支援），「依頼行動」（作業の促し），「見守り行動」（作業状況の観察）の 3 つに定義・分類し，それぞれの生起回数を測定した。なお，各行動は三項随伴性に基づいて記録した。

結果

Figure1 に日別の標的行動数の推移を表した。初日は，新人が「何かできることはないですか」と尋ねても「ないです」と答えていた。しかし，次第に新人が仕事を探す発言を聞いて教育行動が自発するようになった。

特に A は，後半にかけて「～お願いします」と業務を依頼した後に新人の作業状況を見守る行動が増加した。この見守り行動は新人に限られたものではなく，初日から B の作業に対しても見守りを行い，手順書と異なる場合には指摘する行動が観察されていた。

Figure1　日別の標的行動数の推移



考察

本研究を通じ，A 特有の「教える」行動を見出した。特に「見守る」行動は，単なる観察ではなく，手順書との違いを把握し指摘することで「教える」機能を持っていたと考えられる。

しかし，本研究では標的行動の定義を狭く設定したため，「見守り行動」の機能を正しく評価できず，十分な強化子の提示に至らなかった。今後は手順書や成長シートを導入する前に，行動の機能をリアルタイムに分析することが求められる。その上で，見守りを含む A 独自の教え方の価値を関係者が認識し，他場面でも承認・強化につなげていくことが重要である。

参考文献

高山 仁志・中鹿 直樹 (2017). 正の強化で維持される行動の選択肢の拡大をミッションとする立場から見る二人称の科学 対人援助学研究, *5*, 13-17.